震災彙叢

田満居士

特47
455

056512-000-3

特47-455

震災彙叢

田満居士／編

M25

CAM-0027

七八701

震災彙叢

全

明治廿四年十二月一日印刷
明治廿五年四月廿九日出版

（非賣品）

特47
455

明治二十九年十二月

小代

震災彙叢

三重

田滿居士編著

我邦は既往の歴史に徴するに世界中最も地震多き國にして、大地震の都度吾人が慘害を被むる實例は枚擧するに遑なしと雖も、古代より延て安政年度迄其著しきものを摘載すれば推古天皇の御宇七年四月廿七日大地震ありて、家屋の破壞するもの甚だ多く次で白鳳十三申年天武天皇の御宇十月十四日の夜に大地震ありて人畜の死傷又夥しく、日本記にも曰く、土佐の國に田圃五十余万頃陷沒して海となると記載せり、今年より歴年を算ふれば千七百四十八年の昔にてありき、尤も其間尚數回の劇震ありしも悉く網羅することを得されば、讀者諸君諒察せられよ、

其后聖武天皇の御宇に在つて天平六年四月大地震あり、家屋の仆るゝ數多にして死傷又算へ難し、而して神武天皇の御即位より千四百廿二年を經て淳和天皇の御

宇天平寶字六年五月美濃飛彈等の國に地震ありしが、當時は敢て大震と稱するものにあらざるも、多少の震害ありしことは歴史上又掲載せり、而して清和天皇乃御宇貞觀六年五月廿五日及び七月十七日の兩度激震あり、駿河の富士山兩度燒けて地大に動き、民家は海と共に陷沒する乃慘狀を呈せり、仝しく十一年五月廿六日陸奥乃國は強震人畜の死傷家屋の潰れたるあり、又土地陷落して海となるものあり、其后十一ヶ年を經て又大震あり當時陽成天皇の御宇元慶四年にして、殆と一ヶ年間は震動止みまなし、十二月六日に至つて尚又一大劇震あり京都の宮城を損ず、最も當時京都に在ては、家屋の倒潰せしもの甚た多く、茲に高倉天皇の御宇治承元年十月廿七日にも大震ありて、彼の有名なる奈良の東大寺の大鐘は遂に地震の爲に振落されたり、之れに尋ひて後鳥羽天皇の御宇文治元年七月九日は非常の大震にて、人畜の死傷夥しく家屋の顚覆又多し、殊に土地の龜裂するもの數ふるに由なしと云ふ、其后は後深草天皇の御宇正嘉元年八月廿三日にして、此日の如きは隨分文治以來の大震にて山岳の崩るゝもの及び人家の破壞したる其數

算し難く、殊に鎌倉地方に至つては地裂け水涌き或は火災の爲めに一層の慘狀を極めたりと云ふ、元來鎌倉は古代の歴史に徵すれは地震多くして、伏見天皇の御宇永仁元年四月に大震ありて死傷者の人員殆んと二万餘人に及ふと云ふ、其他小震に在つては實に枚擧に遑なし、

茲に後醍醐天皇の御宇元弘元年七月三日大地震あり、紀州即ち今の和歌山縣千里濱に於ては、海の陸に變じたるもの廿余町もあり、同七月七日富士山の絶頂崩るゝもの數百丈に及へりと云ふ、元來富士山は長狀少なき山岳なるも、東山天皇の御宇にて寶永四年十一月廿三日は、地震にはあらさるも大に燒け、灰の降ること恰も雨の如くして、數日の間天は暗黑となり、毫も日輪を見さりしか、同月廿八日に至つて漸く止むと云ふ、尙古書によれば、寶永山は此時に生したりと掲記せり、而して本年富士山の崩壞せしは、去る十月廿八日地震の后ち僅か十分間を經て（午前七時とも覺へありと）非常に鳴動し、恰も屋上に大雷の鳴るか如き響きありたりしに由り、直ちに山梨縣の境界なる籠坂峠の山腹に至り、望遠鏡を以て

觀察するに、富士山の北面牛ヶ淵より釋迦ヶ嶽に方りて凡そ其の廣さ二百間位にして深さ百間程を崩壞したると云ふ、然れども遠く望めば敢て富士山の形狀を損したりと云ふ程にはあらざる由に聞く、

又後土御門天皇の御宇文明六年の地震の如きは、數月間動搖止まず人畜の死傷は固より算へ難くして、家屋の倒るゝもの甚だ多し、且つ後柏原天皇の御宇永正七年八月七日の如きも、大震にして人家の倒るゝもの是又實に算し難く、而して又正親町天皇の御宇天正十三年十一月廿九日の如きは、非常の大震にして人畜の死傷最多く、殊に海邊の地は潮水陸地に浸入して之れか爲め水沒したる死人千を以て數ふるも尚余ありと云ふ、

而して其后は後陽成天皇の御宇にて慶長元年七月十二日の事なりしか、震動激烈にして、家屋の破壞人畜の死傷幾万なるを知らず、其實況は到底筆紙に盡し難しとあり、后又東山天皇の御宇寶永四年十月四日は、五畿内の諸國及南海道の各國非常の大震にして、人家の崩壞土地の龜裂人畜の死傷最も多く、加之地動の爲に海嘯起り、之に由て損害を被むりたること言語に盡し難く、就中大阪の如きは古書に就て見れば、恰かも本年愛岐両縣に比して其慘況彷彿たり、殊に其死人の多きこと殆んど三万余人に及ぶことあり、之れに次ては紀州及び土州にも被害頗ふる多しと云ふ、

其后は仁孝天皇の御宇文政九年七月及十二月の両度、美濃國に大震あり其害を被ること最も多し、全十一年十一月十二日越後地方に大震ありて、家屋の崩壞するもの人畜の死傷頗る多く、之れに次で南帝即ち孝明天皇の御宇にて弘化四年三月廿四日信濃の國は最も大震にして山嶽の崩壞するもの多くして、殊に善光寺（今の長野縣長野町全市崩壞）は出火全町を燒失し死亡そるもの無慮三万余人、其年五月に至るも尚震動止まず、殊に更級郡と上水内郡の間を流るゝ犀川は、土地崩壞して川を塞ぎたること數日間なり、故に山伏村以西は一大新湖の狀あり、然るに旬日余の潦水俄然放決して其水一時に流下するの勢ひは、恰も海嘯に異あらずして人家の流亡最も多く、川中島の諸村に在つては一時に推し來る洪水は怒濤を作

り、頗る激烈にして老弱男女の周章狼狽殆んど遁難の地を尋るに汲々一、其實況は實に名狀すべからざる有樣なりしと云ふ。

其后は彼の有名なる安政二年十月二日の大震にして、舊江戸（今の東京）は三里四方の全市は灰燼たる激震に遭ひ瞬時に人家を破壞し、火を失して江戸一面の大火となり、其燃々たる猛火は天にたなびき、尙地動三十余回を劇震す、當時死亡者は一万余と云ふもあり、又實際に在つては或は三万以上なるべしとも云へり實に其慘酷なることは今尙人口に膾炙する所なり、

嗚呼我國吾人の棲息する宇宙間の最も慘酷なる悲境を與ふるものは、蓋し地震より甚しきものなし、其災害の最も慘且つ酷なるものにして、之れか前兆を知る能はざること遺憾の次第ならずや、余は幼少のときより古老の說を聞くに、地震のある前は雉子鳴ひて前兆を知る、云ひ、又或は雉の宵鳴することもありと云ひ、烏空中に群飛して鳴くこと又甚た頻繁なりと聞く、思ふに是等の說は固より學理上より研究したるものにあらずして只經驗上より之れを唱道するに止まるものと云はざるを得ん。

抑も地震の如きは瞬沙時にして、吾人が安全として起臥し、快樂として事業を採る家屋も忽ち崩れ、混淆せんとするの身体の自由を失し、狼狽するの暇もなく戸扉密着して開く能はざる勿論にして、若し壓死の難を免るゝも墜梁崩屋の內に欄捻され、偶ま人の救ふに遭ざれは遂に饑渴して死途に就かんか、將た火災の次て起るあらば、生きながらにして火中に葬るゝの難れ果なき最後を遂けざるを得ん、思ふは常に注意こそ最も肝要とす。

今讀者に向つて余が其注意を請ふ所以を開述せんに、常々學者の唱道して曰く、地震は今尙前知すること難し、故に先つ安全策を第一に求め置かざるべからず、即ち其安全策とは所謂家屋の建築是れなり、而して第二は時に當て狼狽せず以て常に避難の方向を辨ずるの二あるのみ、然れとも家屋の建築に至つては、地震を按して現在の家宅を毀ち新築する等は、到底言ふ可くして行はれ難し、故に現在の家屋不完全ならは、其家屋の釣合を見据へ置き、若し震動の時は必らず此方向

に避難すれは尤も身を處するにも易からんと云ふか如きことを定め置くこと、最も必要の注意なりとす、若し之れを定め置かざれば地震劇發家屋破壞のときに當つては、外に逸出奔進するも瓦に當り、頭腦を破つて非命の死を遂くるものあり、或は地裂間に狹まり、或は陷落地に陥入り、遂に全ふし得る身体も爲めに重傷を被るものあらん、實に愼しむへく又注意すべき事柄と云ふへし。

夫れ危險と安全と岐るゝものは間髪を容れさるの一瞬間激震の際、決意の如何にあることを思ふ可し、而して又微震の動搖より來る大震も古來間々あることなれは、微震を感じ或と同時に戸障扉を開放して曩に定め置ける避難の方向に逃げ出す可し、而して其家宅を出つると共に火氣に注意し置くべし、然らされば信州に在つては弘化四年大震の如き、武州(東京)に在つては安政二年の如き、尾州濃州に在つては今回の如き、獨り震災に依て家屋の崩壞するに止らず、火災各所に繼發し僅かに身を以て免かれ得るものも、火焔の迫迫に遭ひ、助けを求むる數万人の罹災者も爲めに無慘の毒焔に沒せらる、夫れのみならず一家の財寶も亦烏有に歸し去ること勝裏に時うべし。

殊に夜間の地震は一層の危險なるべし、何れの地方を問はず現今使用する所の石油洋燈より起發する火災多くして、之れか燈火の安全法は未た充分の材料はなけれとも、學者の說によれば、地震燈及び植物油燈を最も安全なると云へり、此兩燈の如きは地震の動搖によりて轉倒するも傾斜すると同時に火光を滅るすにより、轉倒するの時は已に火光滅したる后なるを以て毫も火災の憂なしと云へり、此說は余も亦確實なりと信す、而して尙又恐るべき乃一事あり他かし信濃の國は大河多き土地なれば、河川に接するの町村に在つては震動の爲めに一時渦水等を起し再ひ膨漲溢水して、堤防を破壞し家屋を流失する例、世間に乏しからず、已に岐阜の如きも左のみ大水と云ふ程のこともあらざれとも、震災後俄然激水起り之れが爲めに損害を被りたるもの實に少なきにあらざるべし、次に海嘯も亦地震と繼發するものにして、大阪及四國に於ては震災を避けんか爲めに船に乘したるもの多かりしか、忽ち海嘯の來襲に遭ひ、溺死したるもの多し、故に海濱に住

居するもの豈戒愼せずして可ならん乎。

是皆我國のみに止まらず伊太利國の大地震、或は佛國西國の大地震、亞羅巴土耳其の大地震にも此例のれば、識者願くは其轍を踏むべからず、現に歷史に顯はす所のものを閲すれば、震災の度數は後世尙倍々增加するが如し、然れども今や余をして言はしめば、世の進步開明に赴くと共に地震に對する注意益々深くして、人の震災を被るもの又少なからん、失れ土地の開くると共に人口も增し事業も增し、土地人民の擾息をる區域も亦廣大ならん、然らば自然被害の度は數多なりと言ふも、是れを以て地震は後世に度數を增の其威力を增加すると云はゝ、蓋し土地の開けたると人口の增加したることを比へずして、單に地震のみのことを問査したるに過ぎざるもの云ふと可し、

抑も本年の地震に在つては我邦至る處其震動を感ぜざるはなし、然れども震動の中心点は即ち岐阜縣美濃國及び愛知縣尾張國とす、今ゝ岐阜縣より內務省へ報告せられたるものを擧くれば、

十月廿八日午前六時過俄然響あると旋しく地大に震ふ、續ひて小震動止まず市中の景狀速知するに由なしと雖も目前の形勢實に未曾有と謂ふ可し、須臾にして各所出火あるを見る、忽ちにして地裂け屋倒れ死傷無數、警部長丸山晋俊は今泉巡査屯所に出張し警吏を指揮して各所に派し救濟せしむ、書記官藤屋伍一鹿、參事官後藤敬臣と今泉派出所に會し臨時救難所を設く、內務部第一、第四課員及び警部其他に救難掛を命し一時救助焚出等を爲し、一面は市役所員に協議し急救せしむ、而して負傷者は病院に於て盡力すると雖も、市中の廣き負傷の多き之を普くするを得ず、因て市中開業醫を呼び集め先づ岐阜縣警察署に假病院を設け之に赴かしめ、且つ師範學校 中學校 各生徒を集め各所に分派し人命及び火災を救援せしむ、同午前十時至り又一震、同十一時四十分大震、小震動は現時に至るまて止むことなし、各吏員の爲め焚出場を師範學校內に設け之れを施行す、監獄內は房 三箇所破壞、囚徒二人即死、二十人負傷、巡査看守押手各々一人壓死、縣屬西村元長右腕を折り、松本信妻同人娘負傷、米岡斯近

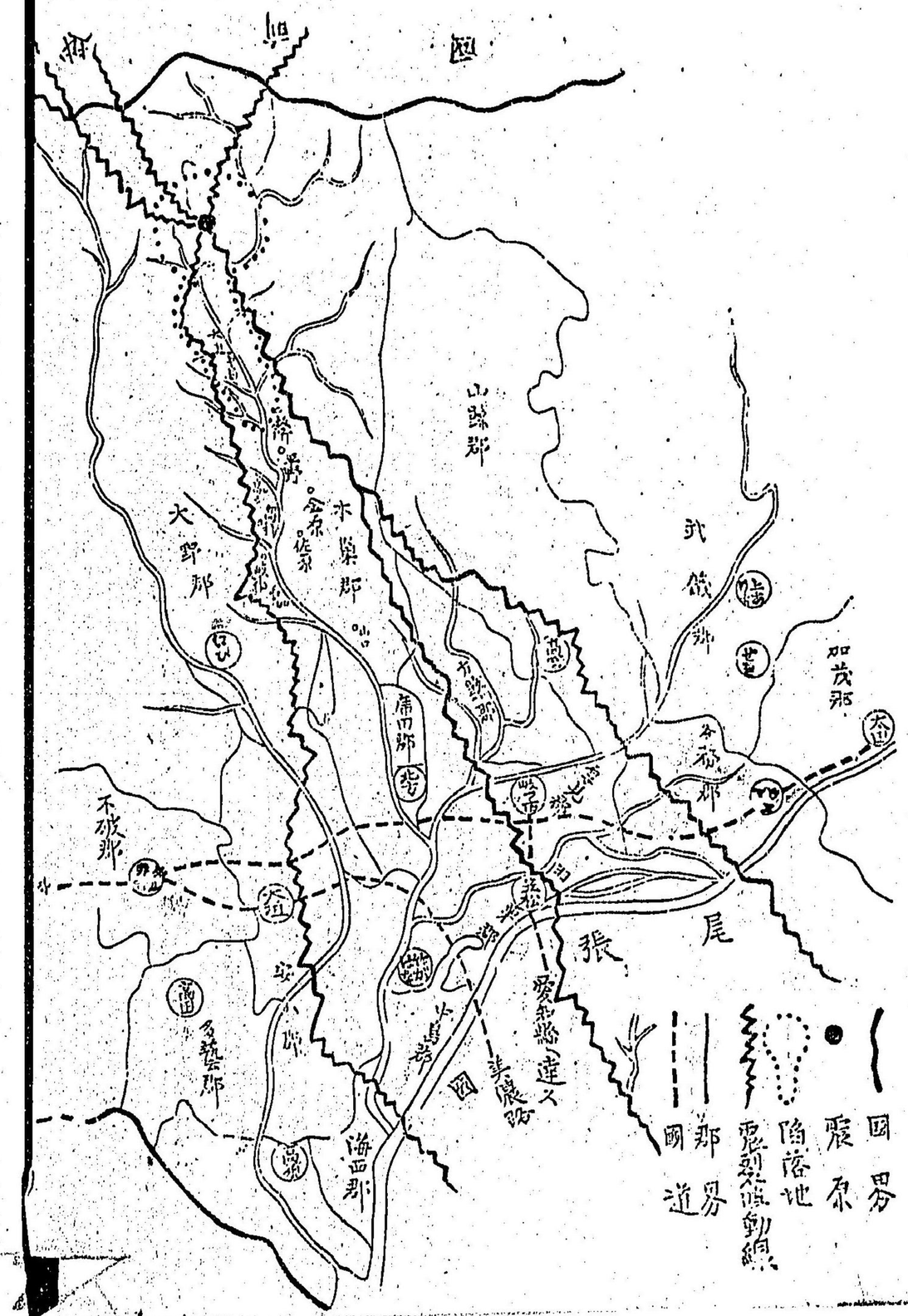
妻同人孫歴死、本巣席田郡長川倶止名歴死、北方大垣、近の島、加納等被害最も甚しく、家屋は過半壊頽、人畜の死傷夥多なりと、未だ其詳報に接せず、縣廳は多少破壊すと雖も、書類簿册等皆安全、測候臺破壊せり、議事堂は玄關倒る、郵便局宿直員二人歴死、市内車の町上々門下新町其他三箇所程失火未だ鎮火に至らず、其外加納町よりも失火未だ鎮火せず、之が爲め死傷の報頻繁にして枚挙に遑あらず、尚ほ追て詳報すべし、

震原の實査　　開く處によれば今回の地震は岐阜縣下美濃の國の北方福井縣に接近する所の白山（世人の稱する加賀の白山とは異なれり）は大野郡西根尾村大字能郷にありて、廿八日該山の形ちは常に變ず、又其隣郡なる本巣郡長島村に山崩れて土地の陷落したる箇處多く、之に依て岐阜縣廳は震災の原因白山にあらんとの考へより、探索の爲め該縣測候所長井日龍太郎を白山の麓なる根尾谷に派遣せしめたると云ふ、即ち其復命なるものを左に擧く

大野郡西根尾村大字能郷の内藤谷の山脈は白山の直下にあり（其絶頂より下たること五里）左右山嶽對峙し其近傍に五十年前より二三の鑿穴（直經十間内外）あり、之に木石を投ずれは瀑然數時の鳴動あり一と云ふ、（此鳴動によりて考ふれは必ず其鑿穴の下、地底の空洞幾百丈なる知らず）然るに十日廿八日午前六時三十五分一大鳴動と齊く左右に聳る山岳忽ち陷落して土砂烟霧の如く卑脈一、其近傍の各村一時暗黑となり、其山形或は凸變して川となるものあり、（方里余）或は崩壊して半身を剝落斷し、又は其位置方面を變するあり、蓋し皆陷落の結果とす、而して第一震烈波動線に中る山岳は悉とく分崩し、爲めに長島天神堂、水島及び板所近傍の人家田畑は、其位置を變して破壊し、道路橋梁の類亦陷落埋沒して其原形を失し、又根尾川の河底は著しく高低を生し、或は激湍をなし、或は潴水を現そる等、此藤谷の余波にして、全面の震原は此陷落に起因せるものと認むと復命し、震原及震裂波動線の圖なるものは即ち次葉に挿入せり

岐阜の震火災　震原は前陳測候所長の復命に由つて偶知せらるゝならん　然れども其后の實況益々慘境に陷りたるものは震動中の火災是なり　十月廿九日　小晴

岐阜縣知事は　内務大臣に報告して曰く　廿八日午前六時三十七分　劇烈なる地震起り　地裂け家倒れ　人死するもの其數を知らず　加ふるに火災之に次ぎ　其慘害實に名狀すべからず　就中　岐阜市　及び　安八郡大垣町　羽栗郡笠松町　武儀郡關町等被害　最も甚しく　岐阜市は　家屋崩壞　凡そ　全市四分の一に及び　死傷者算へ難く　火災六个所に起り　内三个所は直ちに消し止め二个所は一二ヶ町を燒き　今ま一个所は　延燒の數　巨大にして　即ち　大字鍛冶屋町に起り　下新町に至り　再び鍛冶屋町に出で珠城町に移り　是れより　火勢　二派に分かれ　一方は　加茂町　竹屋町　鞠屋町　末廣町　米屋町　櫻町　矢島町　松屋町　常盤町　笹土居町　上竹町　太田町　小熊町に至り　廿九日の午前七時に及んで　漸く鎮火を　又一方は　東材木町　西材木町　加和屋町　魚屋町　今小町に至り　今尚ほ　熄まず　火勢　漸やく北進するを以て　金華山の麓に達せざれば　鎮火せざるべーと思はる　此火災の搦め　市中の藏



家及び繁華の街衢は大半を燒失灰燼したり、然れども縣廳、裁判所、監獄署、郡役所、警察署等の諸官衙は幸ひに小破に止まり、又火災を免れたり、大垣町は全市九分通り崩壞し、死傷の數未だ詳かならず、且つ火災は五六ヶ所に起り市街七分通りを燒失し、裁判所、監獄署、郡役所等は皆倒潰せしも、火災を免がれあり、笠松町も亦家屋の崩壞、人畜の死傷、無數にして、火災甚し、關町は潰家凡そ五百戸余、死場未だ詳ならず、出火二ヶ所にして、其延燒は二百五十戸余に及べり、其他各町村、到る處家屋の崩壞、人畜の死場、數へべからず、未だ詳細の取調を爲すの遑なけれども、概するに、美濃國、中部、東南部、震動最も劇しく、東北部に至り、漸く微弱なりしものゝ如し、飛彈の國よりは、未だ報告なしと雖も、蓋し甚しき被害あらざるべし、右に付、本縣廳にては、縣廳前を救難所とし、屬官警部を以て導ち救護の事に當らしめ、而して警察官は各部署を定め、一面は屋下に埋沒せられたる死場者を一々發掘して、治療を與へ、一面は、消防に盡力せしめ、又發出米を爲むして一時の急を救ひ居れり、又大垣、笠松、兩地へは、屬官を派遣したれども、何分、驚天

焦眉の危急なるを以て、未だ各郡村へ派出せしむること能はず、又尙詳細の景況は追々報告に及ぶべしとの事なり、

然るに知事が報告中、其大垣町全市九分通りの崩壞七分通りの燒失と前にありたるか、翌日詳細の實況を聞くに、廿八日の朝、微雨ありて、六時四十五分頃大に震ひ、忽ちにして、空中は一時に霧りの降り來りしが如く、目先き種々に見へて、奇怪の臭氣紛々として鼻を撞來る、之れと同時に四五町より一時に火を發したり、故に此際東西に狂奔するもの、皆面色土の如く、往き逢ふもの互に一語だも發せずして、或は朋友を救ひ、或は親戚を見舞ふに急にして、暫て他を顧みるに暇まあらざるなり、當度、壯寺に在つては、舊藩主戸田家菩提所圓通寺は、本堂を除き其他は渾て崩壞し、又縣社八幡宮は本社附屬とも皆崩潰す、而して又宮町は南側とも悉く崩壞し、其殘りたるものは僅かに半潰の家屋二戸と土藏五棟あるのみ、東外側町は稻荷迄悉皆崩壞し、桐ヶ崎町は是又一軒の殘りたるものなし、粟屋町も亦た等しく崩潰す、岐阜町半潰五軒ある迄にして其他は悉皆崩壞し、東側中央より以南は皆

燒失す、其他傳馬町　柳原町　清水町　松濤町は悉皆崩れ　新町　清水町　中町の如きは燒失して殘るものとて更になし、本町西側は南方に七八軒潰家あり、北は大手入口より小橋邊迄燒失し、又其東側は殘る猶なく燒燼せり、中町も殆んど燒失せしか僅かに東側中央に九尺二間の土藏一棟を存するのみ、魚町は全燒東長町は悉皆崩潰し、南は名鐵より南　北は村上より北を殘りて燒失し、藤江は一里塚迄悉く燒失す、高橋町は四丁あるか皆崩潰し只一軒を余すせり、竹島町は横町にて五軒潰れ、其他は四分通崩壞す、後町は八分通崩壞し龜屋町は八戸を殘し其他は全潰し、船町上町下町は何れも十四五軒づゝを除き他は皆全潰せり、而して郵便局・裁判所、警察署等苟くも官舍に屬するもの一として全きものなしてはなし、即死したるもの七百人　負傷者は千三百人　潰家三千五百余戸　燒失したるもの二千余戸なりと云ふ、又柳町にある開顯寺は此震災に遭ふて迦羅の崩壞するや、爰に集せりし一男善女の壓死するもの二百余名に及ひ、加ふるに火を失したるを以て同寺は灰燼となり、爲めに其死屍を焦土中より堀出するも最早其誰れなるを知るに由なし故に白骨は累々脊髓の片骨あり、頭顱半は鮮血に染みたるもあり、實に名狀すへからざるの慘況と云ふ可し。之れに依てか　天皇陛下及び皇后陛下には御救恤として各々金三千圓を岐阜と愛知の兩縣下へ下賜せられたり、就ては是れより暫らく愛知縣の實況を左に擧けんとす。

名古屋市は十月廿八日午前六時三十分より大地震あり、市中の死人二百名余にして負傷又は人家の破損は其數を算し難し、失火は七、電信局　停車場　尾張紡績會社等は全く破壞し、縣會議事堂　秋琴樓等は半潰　其他官民家屋の破壞夥ゐし、各所に救難所を設け各新聞とも休刊せり、師團の兵は市中を警固し人心胸々、縣下西北地方は最も甚しく人家大半潰れ失火多し、死傷數千、道路堤防等破壞多し、地方税の損害五十万圓余、地震尙頻りにして安政以來の大地震なり、名古屋監獄署は倒れて在監囚人負傷七十三人　死亡十一人　刑事被告人死傷なし、倒家七棟其他　物置　總て大破損せり、監守二人女囚取締一人押手二人負傷せり、內看守一人は重傷、囚人工場は死傷なし、潰家四棟其他物置何れも大破損、死傷八模樣未だ

詳ならず、因人二人所在不明、又只今(三十九日午后一時五十五分)迄の全縣下の死亡千五百三十三人 負傷四百三十六人 潰家九千四百七十五戸、其他 道路 鉄道 堤防 溜池の破損多し 最も被害の甚しきは丹羽 葉栗 東西春日井 中島 愛知の六郡と名古屋市なり、避難者は皆露宿し、師團の兵隊は憲兵及び警察官と共に潰家の片付非常警戒の補助を爲し、出火十余ヶ所にあり戸數分明ならず、縣廳は事務を休め假小屋を設けて震災に係る事務のみ取扱ふと云ふ、

而して三十日及び三十一日の電報によれば西春井郡の各村及び琵琶島町の慘酷なる現況は到底筆紙の能く寫し得ざる事なるか、廿八日午前六時過激震ありしより午后二時迄は間斷なく動搖し、夫れより三十日午后六時まで地震の總數三百九十三度にして其内最も激震なるものは十五回、被害の概況は名古屋市死亡百七十一人 負傷二百七十一人 全半潰家千八百五十三戸、愛知郡死亡百五十一人負傷三百八人 全半潰家殆んど二千戸余 西春井郡死亡二百五十六人 負傷四百七十四人 潰家四千五十七戸 丹羽郡死亡四十三人 負傷二十人 全半潰家七百八十二戸 葉栗郡死亡三百余人 潰家五十余戸にして其他負傷の數は詳かならず、又中島郡 海東郡 海西郡に在つては死亡千六百十二人 負傷九百八十八人 潰家二万五千二十四戸、其他各郡大小同しからん、翌三十一日に至り 縣下の被害を調査したるものと云ふを電報せしに、其數死亡の合計二千百六十九人 負傷二千七百五十七人 潰家三万四千七百九十九戸にして地震の度數四百五十回なるも今尚止まざる由、

而して其の西春日井郡は四ヶ町三十四ヶ村より成立し、其最も慘狀を極めたるは琵琶町 新川村 清洲町 川中村等を以て數ふ、殊に琵琶島橋を狹んで東西に分れ其西琵琶島町は戸數千二百戸 東琵琶町は五百四十六戸 人員併せて七千三百三十八人にして、震災の爲めに倒潰したる人家千三百十戸、東端より西端迄橋梁を中間として殆んど一里の間両側の町家悉く紛碎され、琵琶島橋は陷落して西岸の堤塘五寸乃至一尺余の龜裂を現はし濁水噴出し、之れに加ふるに東西五ヶ所に於て出火し半は倒れんとする家屋は皆之れが爲めに禁略し去られて、道路に彷徨するもの夥しく其慘狀云ふ可らず、本日迄に探出せる死屍四三十人、傷を負ふもの

四百余人の多きに至れり。

郡役所 警察署 憲兵屯所、各學校等は悉く崩壊し、數千の困窮者は寒天に戰慄しつゝ老幼男女隊を爲して郡役所の門前に群集し、給米を哀求して止まず、殊に川中村の如きは全村殆んど潰破に歸し、庄内川に沿ふたる八千余間の堤防は全く川底より一尺余も陷落して、河水其間に浸入し稻田に溢るゝに至れり、

熱田町は戸數四千五百 人口二万余口にして 震災の爲めに全潰したるもの五百餘戸 寺院二十 壓死十五人 負傷百五十人にして 其粉雜の狀況は名古屋に劣らず、

同町役場の門前には二千二百七十八名の罹災困窮者か入り交り立ち交り給米を哀求するの實況は、實に目も當てられぬ次第あるは我身に取て聞くも滿腔の思あらしむ、況んや實地其有樣を 擊したる慘狀こそ憐はれなりと云ふ可し。

又名古屋の犀張紡績會社は最も悲慘の境遇を呈したり、此の會社は一日の事業を分割して八百五十名の工女を二分し、晝業工女四百五十名と夜業工女を四百名とす、然るに大地震の拂曉即ち十月二十八日午前六時頃 夜業工女其四百名は 晝

業工女四百五十名と入り交りを濟まして間もなかりしか爲め、入り交を爲して事業に就かんとしるる晝業工女數百名は、實に此の震災の中心に巻き込まれたるは氣の毒とも云うべ尚ほ餘りあることにて、眞とに其入り交りたる工女か事業に就くや否やの瞬間にして忽然大地震を來たし、忽ち巍峩たる煉瓦石造りの大厦一時に破壞しかるにぞ、其崩壞以前に難を屋外に免かれるものは殆んと總數の三分の二に過ぎずして、殘りしものは漸やく紛亂されるる煉石の間より逃れ出るもの多きに居れか、即死したるものは三十七名にして、負傷したるもの百十三名に至りしか、該工女等は困窮者中赤貧の婦女にして斯の會社ありて漸く口を糊するものゝみなれは、斯かる同社の崩壞したるに就ては、今後八百余名の工女に在つては實に名狀すへからさる窮困に陷るは目前の燈火よりも猶ほ明かなり、又同會社の建築は六万圓餘を費やしるる構造にして、其機械の如きも二十五万圓餘を以て購得したるものにて、今回震災に就て損毛を受けるる其費額は莫大なることは勿論、機械の全く破碎されて用を爲さゞるものも尚ほ二三万圓を出で、其他多少の

損害を被りたるもの、修繕を要するもの枚挙するに遑なしと云ふ。

爰に於てか現時名古屋市中の有様は恰かも去年大演習以來の大混雜にして、一ゐひ震災の各地に傳ふるや、東京、大坂、京都等の各新聞社員は、到る處鐵道の破壞せるにも拘はらず晝夜兼行にて陸續名古屋に入り來り、土地の新聞は日々號外を發し、市中孰れの旅舍も悉皆來客を謝絶され、殆んど道路に彷徨せる有様にて、其混雜なることは前に述ぶるが如く、去春大演習以來の景況にて殆んど戰場に異なざるべし、

而して名古屋市は勿論、縣下各郡ども、其人民何れも老を扶け幼を携へ、路上に天幕を張りて野宿を爲し居るに、其間尚ほ毎時七八回乃至十數回の震動ありて、人心乃胸々たること實に言語に盡し難く、大小官民何れも事業を廢し晝夜東西に奔走し、罹災者の救難に盡力するも何分各地倒潰の家屋甚だ夥しく、之れが爲め壓伏せられて出づることを得ざるもの其幾万人なるを知らず、警察官の救護も到底足らざるより名古屋鎮臺にては各聯隊を罹災地に派出せしめて消防に助力するあり

或は救助所に出でゝ炊出方に盡力するあり、或は毎夜部署を定めて非常を警戒するもあり、或は又監獄署に出張して獄外に出づる所の千五百余名の囚徒を守護しある等、其注意の周到なる、盡力の不容易なるは感謝するの外なし。

然るに之れに引き換へ物價の騰貴は實に非常にして、何れも大概通常の三倍以上に達したるは他の奸商等の所爲ならんと云ふ、實に惡むべきの罪人と云はんか、其れが爲めに市中到る處、窮民の饑餓甚しく、甲の携へ行く處の米食飲料を白晝途上に於て乙が之れを奪はんとして相鬪ふものあり、或は救濟所へ食券を持參し求食する處の老幼者の食券を横奪するもあり、又救濟所へ來る處の老若男女は、宛ども蟻の甘きに集くが如く見るも中々憐れなり。

殊に名古屋は美人乃多き土地なれは其が榮達と稱する藝妓百五十余名は市内東照宮の神社内に避難し、又同地地廓の藝娼妓一千有余名は其近傍の寺院内に避難屯集し、何れも戰々慄々として言ふ可からざるの奇觀を呈せり。

又宮澤も人家既ふ倒れ人民は皆蓆小屋を作り漸く雨露を凌ぐ有様にて、貧民は此

處仮處に食を乞ひて漸く生命を繋ぎ居るの狀況は、書くも歎泣の次第なり。

茲に於て　皇帝皇后両陛下より三十一日を以て更に両縣へ一万圓づゝを下賜せられたり、右　就き品川内務大臣は両縣地へ出張せらるゝ由に聞き及びしが、同大臣は病の爲め松方總理大臣は即日出　實況現察として出張せられたるか、其景況の聞よりも尚ほ數倍の慘狀なるに驚かれたると云ふ。

當時大臣か目擊せられたる悲境の其一きものを擧くれは、兩縣下數千の壓死者は算を亂して倒せし家屋の下に推し潰され、程なく燃上る餘々なる猛火の爲めに骨をも止めず燒け失せたるさへ有る中に辛ふして一命丈けは繋きとめたるも、手を折り足を挫き速に治療を得されは不具となり死途にも就かんとするもの幾千の多きを知るへからす、殊に身体生命に慈かなりしも父母に離れ妻子を失ひ、歸るに家なく食するに糧なく、寒風に吹き曝されて淋く露宿せんとするも時に加へて大雨降り霰は鳴り震動絶へ間なきは、安政年度の震災より又一層の困難にして、小屋掛り居るもの露宿するもの、物を預けんとするに所なく衣類は濡れて宛然喪家の犬に均しく狼狽周章、其狀譬ふるに物なしとの事なり。

両陛下には其被害の慘狀を思ひ遣らせられ時く大御心を悩ませられ、震災以來は御寢食をも安んぜさせ給はざるやに洩聞さる、依て両陛下よりは赤十字社員を派出せしめられて、負傷者を救護し殊に待從北條氏英氏を両縣に遣はし實況を視察せしめ玉ひしが、尚追々其慘狀を聞こし召させ更に又侍從毛利左門氏を岐阜縣下へ　侍醫尚階經本　岩佐登爾太　桂秀馬の三氏を両縣下へ差遣はせられたり。

實に聖恩鴻渥　海よりも深く　山よりも高く、斯く蒼生を愛み玉へる御仁慈の程こそ有り難き仕合にて、編者は書くも感泣しつゝあることにあり、是より岐阜縣下の近況を暫く述べん。

岐阜縣根尾谷は地震の原地にして其根尾谷筋は慘狀も亦言語に絶し、岐阜市及ひ大垣　關町　竹ケ鼻等の比にあらざるべし、殊に該地は偏僻にして常に食糧に豊かならず、醫師を頼はんか里余の遠きにありて、只だ豊饒なるは薪炭の供給のみと

云ふに如く一見して山間不便の僻地なることは察知するに足れり、同谷内に散在せる村落は東板所 板屋 樽見 小鹿 西市場 神所 中村 越卒 門脇 長峯 天神堂 黒津 長島 舟波 大河原 佐原 金原 日當 平野 水島等にして、人家は一戸も殘さず倒潰し、其數を調査したるに潰家九百七十戸余 死亡二百五人にして負傷者は二百四十人なり。

尚に陳へたるが如く山間食物なき地なれば、各々飢餓に迫り將さに人類相食まんとするの有樣にて、殊に東板屋 樽見 天神堂 黒津 金原 日當 平野 水島 等の諸村は最も悲慘の有樣を極むるのみならず 此邊の地震は一種異樣の現象にて、例へは物を以て土中に突き入れたるが如く、或は又巨人の手を以て屋上より押し潰したるか如く 多數の潰屋は悉く潰れながらにして土中に陥落し居れり。

就中奇と稱すへきは水島より樽見に通ずる間二十丁斗りの所に五丁程の平地あり、此平地は地震と共に五間程も土中に陥りたるか、平地の表は毫も毀損せす又潰裂せす、現況の儘にて陥落し其上に生せる樹木草卉の類も傷害せられそーてある

は妙なり。

又水島村内に於て有名の古刹なる西光寺と云ふ寺あり此寺も同しく遙か土中に落ち込み、上より望むときは唯た僅かに寺の塔ーを見るべし、且つ四方の山々は一として舊形を存するものなく恰かも芋の皮を剝たるか如く、昨日迄鬱蒼たりー無數の樹木は影も止めず兀山となりしは不思議にも亦驚くへき次第と云ふへー。

又是より北に方り白山と稱する大山あり、此麓に一大新湖あり、新聞の報する所によれは今度の震災は南は尾張の津島 一ノ宮地方より北は美濃 越前の國境迄の間 最も激烈を極め 此間を以て震災の中心と稱すへく、乃ち濃越の境なる白山の山下には長さ三百間余 幅五十間余にして其深さ數尋 地盤深く陥落ーて一大新湖とあり波浪漫船を行るへき勢ひとなれり、其近傍の村落三四十戸の民家は殘らす地下に陥落すること殆んと三四間の深きに達し宛然一個の龍宮界を現出した る觀あらーむ。

又此白山は地動破裂後は頓に山形を變し、同山の模樣は恰も先年彼の磐梯山破裂

の當時に彷彿たりと云へり。

又尾濃両縣の南方及北方の地は到る處土地の陷落或は濁水の噴出 殊に甚しくして實に慘況枚擧するに遑なし、且つ木曾 庄内 新川 五條 日光等諸川の堤防は多く破裂陷落して、其損害に至つては到底筆紙の克く盡す所にあらずと雖も、予が友人より報する所のものは次葉に掲記して 以て諸彦に之を告けんとす 讀者諸士重複の厭あるも許容し玉へ

（前略）今回の大震 愛知 岐阜は其中心点にして近年未曾有の慘狀なり 今兩縣下を巡視したるものを摘んで百中の一を掲載せんに 去る十月廿八日 拂曉は晴朗にして最も靜かなりしが 午前六時三四十分頃と覺ゆる 俄然空中一時に曇り恰かも霧の降りし如く 天は一面黑烟を以て蓋ふが如く咫尺辨ぜず 然るに忽然天地鳴動し地表起伏 宛なから波濤の如く 瞬時に地盤は龜裂を現はし其裂口より泥土濁水を噴出するあり 家屋は倒れて其屋下に 壓死するもの幾千人の多きを知らず 加ふるに 餘々たる猛火は四方に上り 殊に烈風八方に

吹き廻り 殆んど道るべ 途なく 親を忘れ 妻子を顧みるの術なく 其實況は仇敵も尙及はざるものゝ如し 實に之れを悲歎の境遇と云ふべきか

昔時此兩縣に大震あり一ことは一簡度に過ぎずして 曾て歴史上に散見したることあるも 今回の如きは 兩縣開闢以來の厄年と云ふも可ならんか、大震后是處彼處と巡視せしが 各所何數回の震動あるか爲め 人心恟々として面色は皆土の如く 老弱男女互に手を携ふて 躊躇彷徨するの有樣は 見るも憐の慘況にして我身に取りて胸迫り 聞くも涕泣の外なし 而して憐むべきは又顚覆したる家屋の下に 埋没せられたる死傷者は 其數幾千人なるを知らず 埋没せられたるもの 到る處に之れを蠶堀し 負傷者にして未だ死に至らざるものあらは 之れを運送して醫師の治療を請はしめ 身躰無傷にして逼出つること能はず、以て數日饑渴して 將に死途に就かんとするもの〳〵如きは 多く救難所に送りて一時の急を凌ぎ死亡者は埋葬場又は火葬場に搬送するもの向背相望み腥臭の氣 全市村落に充滿し酸鼻に堪へさらしむるのみならず 中々非常

の困難にして實に名狀すへからそ

殊に甚しきは潰れたる家屋の上に札を建てゝ此中に壓死者ありとするもあり又死骸の多き地方に至つては崩壞したる家屋に推し潰され腹より臟腑の出つるもあり或は埋葬及火葬の手廻はり兼るものは傷口より腸の如きものゝ溢出るあり或は辛ふして生命は漸やく繋き止めたるも手を折り足を挫きて倒家の中に埋もれ這出ることの出來さりし爲め食を求むるに術なく數日饑渴加ふるに身躰の自由ならさると煩悶苦痛氣力は衰へ聲を發するの勢分もなく將さに其狀死者に彷彿あり是等を掘出して仮病院に送る等は一見人をして戦慄の思ひあらしむ又一方には數万の罹災者所々に避難假宿する其有樣は尚一層の憐れを催せり

茲に又其后今日の現在は震災の際は着のみ着か儘ま屋外に飛び出したるものにして森然一大鳴動と齊しく家屋は軒を並へて崩壞し忽ちにして四方より出火す時恰も烈風を起し四通八達其火先きの吹き廻る勢ひは消防抔は思ひもよらずして命ちから〳〵漸やく老を扶け幼を擁へて逃るものゝみなれば今となり小屋掛又は露宿するもの皆貧富の別なし等しく救助の握り飯をもらゐ喜び持ち來りて親子諸共之を食するにあり

然れとも時節柄寒風凜烈恰も其握飯は氷の如くなりて迚も其儘食することを能はす去りとて之れを温めんか小屋掛り低くして火を焚くに由なく、漸やく少しの炭火を以て土鍋に湯を蒸し其中に氷の如き握り飯を投し粥にして家内子兒一同之れを食し以て露命を繋き居る等其慘狀は不愍も亦余あり

す

殊に氣の毒なるは富豪家の罹災者にして震災后土地を賣却せんか其價廉なるも之れか買求者なく他人に金錢を借りんか亘に無一文なるにより人に貸與するものなく老人に酒を與へんか酒屋なきを如何せん之れに引換へ常に勞働社會の貧困人は日々材木を運搬し或は救難所へ糧米薪炭等を搬送するにより幾分の日雇錢を取りて生活するに由り平素冷飯を食するも身體左

程に感せざるもの　反つて日用品を日々に持ち歸る爲め　現時食物は富豪に優り多少嗜好の酒も購なひ用ひ得らるゝのみならず　子供抔にも鼻藥りの事　又は柿の類を與ふるありて　富豪家の小女子之れを見て羨やみ　小屋掛の家に歸り兩親に告げて又請求するもあり　其子供の羨むを聞て兩親は互に面を見合せて涙だをこぼし　子供をなだめすかせる有樣は他所のことにも思はれず云々

余は此の報に接し一層乃感情を高めたり　讀者諸君　願くは本書を輕々視する勿れ

今岐阜縣被害の統計及び愛知縣被害の統計を擧ぐれは　左の如し

◉地震被害の統計

愛知縣下

震災地現住人口　百四十七万六千百三十八人

內　死亡男九百八十人　女千三百六十七人　合計二千三百四十七人
　　負傷男千七百九十四人　女千八百七十四人　合計三千六百六十八人

全上戶數　三十一万八千四百九十六戶

內　潰家居宅五万四千九百五十六戶　社寺八百八十五戶
　　土藏四千四百八十三戶　其他建物三万八千六百一戶
　　合計九万八千九百二十五戶
　　燒失居宅九千三戶　合計二百十二戶
　　其他建物百十九戶

讀者諸士と此統計に由て考ふるも愛知縣震害の一般を推測るべし　實に死亡者の數と云ひ又負傷者の多き　殊に潰家に至つては十万戶に殆し　此人員を算すれは一戶平均四人と仮定するとき　其數四十万人の多き　困難者あること明瞭の事實にはあらざるか　之れに加へて震原岐阜縣の被害は左の如し、

岐阜縣下

震災地現住人口　百七万八千四人

內　死亡男女を合せて六千七百五十七人
　　負傷全上　一万千四百二人

同上　戶數二十二万八千四百二十四戶

內　潰家　七万二千三百九十七戶
　　燒失　一万二百八十戶

備考　岐阜市燒失戶數は總戶數の半にも足らざれとも凡

そ市中の大厦高屋は悉く烏有に歸し餘を所は邊僻小民の細屋なるを以て其戸數の少なきにも拘はらず其區域は殆んど全市の九分通に當るものとす

之れに因て兩縣の罹災困窮者を算すれは殆んと七十万人の多きにわらんことは察し得らるへし、殊に又一家親戚悉皆死亡し跡に殘りし孤民孤獨の小兒は一千余百人ある趣むきにて岡山縣及東京府下の婦人矯風會とか青年會等より之れを救育せんとのことにて三百名又は五百名と追々各地へ送りたりと云ふ、斯く書して茲に至らば誰れか尚一層の慘狀を感せざるものあらんや、余聞く畏も我両陛下に於かせられては痛く大御心を惱ませられ親王家以下數人の高等官及赤十字社員を派遣せられゐること及び陛下には土方宮内大臣岩村御料局長を御前に召させられ陛下の御勅言に此度兩縣の震災たるや實に非常の慘狀たるは能く承知せり、其他人民の心痛も如何とて日夜に忘れざる所なり、殊に追々新聞に見る所によれは材木なども非常に騰貴し小屋掛材木の買ひ求めにも大に困難せりと云ふ此際岩村は直ちに右兩縣下へ罷り越し臨機の處分を以て御料山林を人民に拂下ぐべし此事汝等に一任すとの御思召にて岩村局長も陛下の深き御仁心に感泣し直ちに御受け申上げ該地へ罷り越されたり斯く如く吾人臣民を愛しみ玉へること今に始まぬ事ながら喜ばしくも亦恐れ多き事と云ふ可し。

是れより筆を轉んして各府縣の震災被害の景況を掲記せんに

大坂府下は十月廿八日午前七時激震ありて浪花彷彿會社は倒れ壓死したるもの四十人負傷者は數百名に及ひ而して又九條村の織布會社にも死傷十四人あり盛業會社に負傷十一人孰れも皆煉瓦造りの破壞煙筒轉覆の爲めに由る其他潰家十三戸半潰五戸家屋土藏の破損に至つては算へ難し倘震動は三十日迄大小其數三十六回其后十一月五六日に及ふも微震尚止ますと云ふ。

滋賀縣に於ては全廿八日午前六時卅分頃地震あり其震動激烈性質は地平動にして家屋の破壞人畜の死傷等あり其被害の實況は概ね彦根に死亡三人負傷十四人潰家廿戸半潰家廿七戸土藏其他破壞廿九个所諸官衙は些細の破損にて先

つ無事と云ふ可し　然れども八幡　其他の各郡を調査すれは　全潰三百戸　半潰二百七十余　破損百九十四にして微震止まず　翌廿九日に至り　一大強震あり　爲めに人心恟々たり

三重縣に於ては全日強震あり全縣下震災の被害稍輕少なり　然も北部即ち員部桑名　三重　河曲　安濃　鈴鹿　安濃等の諸郡は強震と云ふも可なり　今縣下の景況は歴死一人　負傷十七人　潰家六百三十五戸　半潰七百五十二戸　其他道路破裂の个所は廿四ヶ所　其延長二千三百五十間　堤防の欠陥一ふるもの九十五ヶ所にして延長一万五千二百三十六間　橋梁の損落二ヶ所　山嶽の崩壊一ヶ所　尚此外　些少の被害に至つては算へ難と云ふ。

奈良縣下も全日に於て強震ありと云ふも被害の景況より推測すれは微震と云ふも可なり　然れとも縣下の狹き　土地の實況よりすれは強震ならん　今歴史に就て調査すれは文政以來の強震ならん　今般調査したるものによれは死亡一人　負傷一人　家屋の全潰十戸にして半潰七戸其他建築物の潰れたるものは其數六百ヶ所とす。

石川縣に於ては是れ又廿八日午前六時三十五分地震あり　其震力甚だ強く　四分時にして止む　其後微震數回　廿八日の如きは晝夜二十二回人畜に死傷なしと雖も近年稀なる強震なり　罹災者の多きは江沼郡最も多くして　大聖寺町の如きは潰家十二戸　半潰四十三あり　其他各郡市とも墻壁の墜落するものに至つては枚擧そるに遑なしとす。

富山縣は同廿七日午后より曇天となり　俄かに曇氣を加へ　同しく七時頃に至り降雨　翌廿八日に至り雨尚止まざりしか　同午前六時四十分頃地震一震動凡そ三分時間　同しく七時四十分より微震三回　爲めに諸官衙に破損したるもの多く又礪波郡南谷村　射水郡小杉村　及上新川郡相木村と東水橋町等に道路及人家の破損したるものあるも人畜の死傷潰家等なし

静岡縣に於ては全廿八日午前七時頃地震し　近年稀なる震動力にして　縣下遠江國長上郡掛塚村地内天龍川　其他諸川の堤防に破損所ありしか　別に擧けて著しきものなし。

長野縣は南部中上諏訪下諏訪より以西上伊那郡西筑摩郡及下伊那郡幷に以北東筑摩郡等最も劇震にして家屋土藏の顚覆したるもの數百棟而して人畜の死傷に至つては甚た少なく或は強震の部分あれとも概して云へは其他各郡とも微震にして別に異狀なく然れとも縣下何處の地も震動を感せざるはなし而して十月卅一日より時々一尺の太き火烟を噴出し十一月三日に至るも尚止ますして遠く山上を望めは恰も薄雪の積みたるか如くなり之れに就て巨智部博士は其筋へ電報を發して曰く今回の地震は地下に蒸氣の働きたるものと認定すれば淺間山噴烟したるは此鋭氣を拔きたるなりと云ふ。

山梨縣も亦別に大害を被るもの少なく甲府市北巨摩郡中巨摩郡及ひ東山梨郡に潰家あり且つ陶器土器洋燈商店幷に染物屋等に多少の損害ありるも其被害最も輕し其他各郡には別に異狀なし。

日本人の義俠西洋人の感激

明治廿四年（即ち紀元二千五百五十一年）十月廿八日以來の名古屋岐阜地方震災の實況を一見せんが爲め有合せの金六十圓を懷にして横濱を立出でし西洋人あり名古屋に到着して見れは眇しに勝る慘狀にて路傍に佇む貧民の有樣見るに堪へ難けれは携さへ來りし旅費の内幾分かを分ちて與へたるに之れを受けたるもの謝して云ふやう御芳志は寔とに難有き儀なれとも私共は未た最も困難を極むとするには足らす何此先き足を運んで進み行き賜はゞ一層憐むへきもの數へ盡くるに遑あらす願くは是等の人々へ惠み玉はりたし私共は夫等の人々に比べては尚ほ仕合ある内なりかしとて頂きたるまゝ推し返しゐるにそ件んの西洋人は感激して指く能はす與ふるものを受け納むるは何所も同し人情なるに現在其身は貧窶に迫れる容を爲しながら尚は一層甚しきものあればとて夫れに讓りて受けさる義俠心は日本人にして始めて見るべし思へは携へ來れる旅費の少なきこそ遺憾なれ左りなから責めては有り丈けなりとも惠まんと進むに從ひ最も憐れなるものへ少しづゝ惠みゐれは間もなく懷中を拂ひ盡し果は自から歸りの旅費なきに困却したる程なりと云へり、斯くの如く西洋人ですら多少の惠みを爲すに況して吾人同胞の兄弟であれは之

れを傍觀するに忍びんや　讀者諸士　願くは慈善家を誘導し　應分の義捐金をれ一ぬれんことを切に望みて止まざるなり。

福井縣下に於ける震災の景況は　十月廿八日雞鳴より天色　朦朧恰も四顧を蔽ふが如くなりしか　午前六時四十分に至り　蹶然として地大に震ひ屋上の瓦石を飛散し家屋　土藏　社寺　學校等の建物を　潰倒破損し　屋壁廊廂門塀を墜落或は破壞し　山嶽を崩壞し　道路堤防　其他の土地を缺壞或は陷落若くは線裂し　老少は　相助けて難を戶外に避け或は　周章　狼狽の中　誤て負傷し又は壓死する等　實に眼前の慘狀見るに忍びざりき　而して縣下に於て其最も劇震なりしは　越前國福井市及び足羽郡にして特に被害甚しく　之に次くものは吉田郡及今立　大野　坂井　の三郡とす他の各郡に於ては稍々震力の輕弱なりしもの、如し　其後は別に劇震なきも　天候兇角險惡にして晴霽更に定りなく　時々の震動強震を交ゆ　又暗に響の發するを以て人心恟々恐怖の余り種々の忘想を起し　訛說を傳へ頗る不安の情況を呈し　家屋潰倒せざるものも　街頭或は田圃河原等の空地に露宿し　偶々家屋に在るものも戶障

子建具を開放して避難を便にせり　是より先き早く警戒を加へて　湯屋　鍛冶屋　等の焚火を止め　夜間　洋燈を用ひることを諭せしにより　各戶總て提灯を用ひ　交互出火の憂なからんことを注意せり　家屋潰倒の甚た夥多なりしは　足羽郡木田村にして　一大字に於て七十七戶　福井市も亦一町内に廿一戶　之れに　半潰を加ふれば三十七戶の多きに及べり。

官衙學校等の重なる被害は　縣郡内に於て土藏の半潰及破損、り　福井地方裁判所に於ては人民控所を　監獄所に於ては工業場を潰倒し（囚徒には死傷なし）尋常師範學校は其全體破損し　中學校は化學器械室及倉庫破損し　其他小學校の潰倒或は破損ありたるも　生徒登校以前の事なりしを以て　皆其災害に罹らざりしは誠に不幸中の幸と云ふべし。

又福井市及足羽　吉田　大野三郡内に於ける罹災中亦貧にして將に生活の途を失はんとするものには直ちに焚出米等の手當をなし　夫々救助を施行せり　爾后廿九日以來漸々強震の度を減じたるも　時々の震動尚仍ほ止まず　或は暗に響を聞くこと

數回にして間々又不時に強震あるのみならず或は強風劇雨となり又或る時は氣候最も暖に過き恰も梅雨の如き觀を呈して電光雷鳴変々起り終に落雷するに至る等氣象の變遷常ならざるに因り各自未だ危懼の念を斷つに至らず尤も是より先き震動漸往再數日の久しきに彌を以て各々其防禦に注意を加へ去月(十月ヲ云フ)三十日より翌三十一日迄に大概平常の如く業務に就き且破損修補に着手する者あるに至れり。

其他山嶽の崩壞橋梁の損落道路堤防田畑等の欠壞陥落或は龜裂を爲せし箇所實に夥だしく中に就き大野今立二郡に於て其最も變換の甚しきを見るは蓋し今回震災の中心たる岐阜縣下大野郡等に連接する故なるべしと云ふ而して非狹國一圓は越前國に比すれば被害輕し即ち去月廿八日以來本月(十一月ヲ云フ)九日迄の調査に係る被害の數を擧ぐれば左の如し

死亡　十二人　橋梁損落　十二ヶ所

負傷　九十八人　堤防崩壞　三十九ヶ所延長千百二間

潰家家屋千五百七十二戸　山嶽崩壞　六十四ヶ所
其他建物六百九十六戸

破損家屋三千三百八十戸　道路破裂　二百二ヶ所
其他建物千三百十五戸　延長二千七百六十二間

此外各府縣に多少震害を被りたるものあるも些細のものにつき之を省略す讀者請ふ諒察せられよ」

茲に關谷理學博士の述壞ありと云ふを官報に掲載して之を公にせり故に讀者は已に一讀以て服膺せらるゝならん然れども將來地震學の進歩すると供に今日に於ても之れが參考の一助ともならんと思推を因て茲に之れを轉載して本書の末尾に挿入す

地震前知方乃有無

震災地方に於ては小震今尚止まず人心恐々として日夜安んせざるの場合にあり是時人々の最も知らまほしく思ふものは地震を前知するの法ありや否や如何と云ふことにあるべし此問題に就きては目下は之れを前知するの法なしとの一言

あるのみ　然るを其れが爲め猶幾何の言葉を費やすは　無益に似ゐるの思ひあれども　世には之れを前知し得ることに就き　種々俗説あり　從ひて之を信じ　天氣摸樣に異狀あるを見て之れを氣遣ひ懸念する人も多く　殊に人々恐怖の心を抱ける場合には心配の餘り巫に尋ね八卦見に問ひて其無稽なる言辭に惑はされ　益々其迷ひを重ね憐むべき境界に彷徨ふ者亦多るべし　故に此際予は人々の參考にもなれかしと　學理上より地震前知の事を討究し　從來此事につき學者の　研究せしことを始とし　今後研究すべき事　並に彼の俗説の　恃むべからざる所以を　成るへく通俗平易に陳べんとす。

地震前知の事を説かんには　先づ地震の起る原因を陳へ　之と併せ論するを便宜なりとす　今假りに地震の原因を二種に大別して　地外に屬するものを地外原因と名け　地内に屬するものを地内原因と名け　先づ其地外に屬するものより擧けんに古來學者社會に於て地震の原因と稱するもの種々あり　其主なるものは　地震は天氣の模樣　時候の寒暖に關係ありと云ふことにして　理學上の語に換へて云へは空氣

壓力の變動を以て地震の原因と爲すにあり　又日月星辰の位置運行　潮の滿干なども　を以て地震の原因となすにあり　然れども　是等は重なる原因と爲すことを得ざるものあり　そは追々下條に於て説明せん、

地震に於ける其の原因は之れを地中に求めざる可からず　是れ即ち　地内原因にして　之れを大別すれは　左の如し

第一　地辷或は斷層地震と稱し地皮に大なる裂罅あり　或は弱線ありて此處より地層起伏崩壞し地震となるものにして　本邦の地震は　之れか原因たるもの甚だ多し

第二　陷沒地震と稱し鑛泉等の作用によりて地中より物質を鎔解し去り地下に空所を生し上層の土地は其重さにより自然陷沒するものを云ふ

第三　火山地震と稱し噴火の際鎔石の作用　蒸氣瓦斯の噴發に因り　土地を震動せしむるものを云ふ

第四　火山噴裂の現象は地上に顯はれさるも地中には地熱の爲めに生する

蒸氣の膨張力により岩石を割き　土地に震動を生するものにして　是れ我國の如き島國に多く殊に海中に最も多きものゝ如し

却説是より地震前知の事に關し　前に述へたる地外原因に起るものより　究察せんに　世人か地震の前兆なりと云ひ傳ふるは　時候に外れて非常に暖氣を覺ゆる時、蒸し熱くして精神の鬱悶敗時　寒暖の急變する時　天氣模樣の異常なる時等なり、若し右等の現象が　果して地震に關係し其前兆なりとせは　渾て是等の日には空氣の壓力に劇しき變化を起すものなるを以て　之れを一括して空氣の壓力の變化は地震の前兆なりと云ふを得へし　勿論空氣壓力の變化より地球に及ほす力は　強大なるものなれは　左もあるへしと思はるれとも　地球も亦甚た堅硬なるものなれは氣壓の變化か　地中に變動を起す程の力はあらさるなり　左れは空氣壓力に增減を生したる位の事にては地震は起るへきものにはあらす　但た時として　空氣壓力の增減は地震を促すの副原因たることなきにしもあらす　例へは地中にて　地層の崩壞せんとし　地震發起の傾きある際　偶々氣壓に非常の變化あるときは忽ち其崩壞

を促かし地震を起すなり　然れとも是れ常にあらことにあらされは　氣壓の變化則ち天氣模樣　時候に外れて暖氣を覺へ　蒸熱く鬱悶敗感する時等を以て地震の前兆とはなし能はさるへし　斯る理由ある以上は天氣模樣等を見て　案し煩ふは無用の事なりと知るへし　又日月星辰の位置運行は大に地震に關係ありとの說あり　素より天體　殊に日月は我地球に引力を及ほすものにて　例へは潮の滿干あるは日月か我地球に及ほす引力の作用なるか如き是れなり、左れとも是等の引力は地球の强固に比すれは甚た微弱あるものなれは　冤ても地皮に影響を及ほすことは　難きものなり　西洋にても昔より往々日月星辰の運行を計算して地震を前知し得へしと　揚言し　一時大に世人を恐怖せしめし事あれとも　是等は最も無稽の事なりとて學者の憫笑を招くに止まれり　又季節により春夏秋冬孰れの時に地震多かるへきかを研究せし事多かりしかとも未た其効を見るに至らす

西洋にて昔より近年に至るまて　世界各國に起りし數万回の地震に就き　前に述へし天氣の模樣　寒暖の變化　潮の滿干　日月の位置　四季の時候等に於ける細密なる

取調をなし統計表をも作りし人ありしかども 遂に研者を 關係なき事を證明し地震は年中 時を撰ばず 天氣に關係なくして 發するものなることを 明言するに至れり、

斯る次第なれば地震の原因は 到底地外に存せざるものと知るべし 然らば遂に之れを地内に求めざるべからず 地内に屬するものゝ中にても 第一地震の前に磁石が其引力を失ふと云ふことは 西洋にても昔は盛んに行はれ 又我國安政の大地震にも其實証ありしとて 天然磁石に鐵針を吸付け置きある地震計を 作りし人もあり 右大地震の後 舊幕府より時の關學者宇田川瀬氏に地震の取調を命せしに同氏は地震豫防説と題する書を著し 其内には地震は地中電氣より起るものなりとて百年程以前 關人の工夫に係る 地中に銅柱を埋めて電氣を空中に導 の仕懸を記載せり 又大地震の時に電信機又は磁石に變動を起せりと云ふ話しもあり 是等は其理なきにあらず 地震の時は地中にて地層崩壞せんとし 劇しく相摩擦する故遂に電氣を發する事もあらん 左れども是等は電氣が地震の原因なるにあずして 地震の徴めに電氣を起しゐるものと謂ふべし 我國にても地電氣の事を研究せし人ありしかども 小地震の時には其影響を見ざりしと云へり 蓋此事は理學上の一問題となるべし 又昔より雉子は能く地震を前知するとの言傳へあり 其譯を考ふるに地震の前には 大概極めて細微なる震動を起すものにて我々は未だ之れを感ぜざれども 雉子等の動物は 渾て非常に鋭敏なる感覺を保てるを以て能く其微動にも感じ恐れ騒ぐが故なるべし 動物が地震を前知すると云ふ事は 世界各國何れの地にても同樣の云ひ傳へあり 然れども動物の擧動により 地震を前知する事は甚だ迂遠の事にして其頼むべからざるは勿論なり、

地震前知の一手段となるべしとて 一時大に學者の注意を惹き 頗る人々の望を屬せしは 地皮に微動ある事是れなり 之れに就きて伊太利の學者が研究せし所によれば地球上何れの國に往くも地盤の微動する事 晝夜絶へずして 地震の前後には殊更 著しきものなり 此微動は極めて微なれば 吾人は 之れを 感せざれども顯微動器と云へる器械を以て聞く時は 明らかに測る事を得へし 又地震の前には

地中にて種々なる音を發する事を發見せり　是等微動微音の研究に　最も力を盡せしは伊太利國にして　元來同國は最も地震の多き國柄なれは　政府も亦莫大の金錢を費やして　右等の研究を爲さしめ　且夫れ地震を前知する法と稱するもの種々あるべけれども　中にも微動の研究は　最も地震の現狀に接近しるものと謂ふべき方法にして　直ちに地震の根本なる　地中の模樣を詮索するものなければ恰も醫師か機械を以て病人乃腹中を探ぐるに異ならざるものあれはなり

伊太利に於ては　此微動を研究するに就き種々なる機械の發見あり　先年我理科大學にも其一箇を購求せられ微動の研究に使用し　今猶地震學教室に備附あり　然れども最精巧なる機械は　我工科大學の教師にて　世界第一の地震學者と稱せらるゝジョン、ミルン氏の考案に係れるものにして　是れには　晝夜絶へす微動を自記し得べき仕掛あり

又類微音器と云ふ機械を地中に埋め置き　之れを聞くとき　地震の前後には種々樣々なる音のするものなり　是れ最も道理ある事にして　地震せんとすれは其以前より巖石の瓦に磨れ合ひ碎けんとして　ひり〳〵と音を發する事あるへし（現に今回震災地方に於て時々遠雷の如き響きありと云ふものは　是等微音の　一層甚しきものなりと云ふも可なり）然るに此機械は晝夜絶へす聞き取らさるへからさる困難あるを以て實用に適せさるものとす　微音の研究は是等困難の事情あるか爲め　未だ之れを十分調査せし人あるを見す　斯く述べ來れは　微動の研究は實に地震を前知するを得べき良法なるか如く　若し然らんには誠に人生の幸福　之に增すことなけとも遺憾ながらも未た其場合には至らさるものあり　何となれば若し此微動にて地震ある時のみに　起るものなれは　地震を前知すべき屈竟の法となるへきも奈何せん　此微動は只た地震ある時のみならす　空氣壓力の增減する時は著しく微動を起すものにて例へは地球の或る部分に於て　空氣の壓力を增すときは　其部分は之れか爲めに影響せられ　我々か感取し能はざる程の微細なる震動あるか故なり　尤も前にも述へし如く　空氣壓力の變動は地震を起す程の力あらされとも僅かに地皮の上部を震動せしむるには　甚た鋭敏なるものにして　例へは少しく風ある

に當り微動針を窺へは地盤の微動するを示すなり　左れは地中に微動を起し　微音を發するは地震に原因するものもあり　又氣壓に原因するものもあり　此二者を區別するは到底六ヶ敷事にして　吾人にとりて　實に歎かはしき次第なり

以上述し事を約言すれは

第一　地震の主なる原因は之れを地内に求めさるへからさる事

第二　天氣の模樣　氣壓の變化は　地震を發する一の副原因となるへき事はあるへきも　是等が地震に對する關係は甚た微弱にして　毫も之れを以て地震を前知する事の出來さる事

第三　日月星辰の位置運行は地震の副原因たることおきにしもあらされとも殆んど地震に關係なきものとするも可なる事

第四　電氣磁氣と地震との關係は未た十分の經驗なく慥かに分らさる事

第五　雉子其他動物か地震の前に騷くも人間より先きに地の微動を感するか故なるへきも動物の騷動を見て直ちに地震の前兆を豫知することの出來さるは勿論なる事

第六　地震前後に地の微動し又地中にて種々の音を發する事あれとも氣壓の變化する時も亦同樣の現象あれは此二者を區別する事は出來難く目下之れを以て地震を前知するの法となすへからさるなり

右に據れは　昔より學者か種々に心を苦しめ地震前知の法を發明し　我々をして此恐るへき禍災を逃れしめんとし勉めたるも　未だ其効を見さるは　誠とに遺憾なる次第なり、併しなから追々地震の學問も進歩し　遂に其法を發明し　彼の氣象臺に於て暴風警報を全國に發するか如き場合に至るも決して望みなきにあらさるへし終りに臨み猶一言したきは　今回地震地方に於て日夜震動猶歇まず　此後如何ならんなと案じ煩ふ有樣なるより　爰に一書を認め　目下日夜我々の感しつゝある所の小地震は大地震の余波なれは　左程恐るゝに足らす　尤も地震を前知する法なけれは確乎たる事は云ふ可からさるも　昔よりの　地震歴史を考ふれは一度大地震あり續ひて又大地震を發せし事は　殆んとなきことなるを以て　最早安心して然るへし

セメ701

と思はるゝ旨及其理由歴史上の實例等を擧げ以て震災地方の人々に告げ一か
猶又茲に述へ來りし通の次第なれは此際無稽の言を信一或は時候乃寒暖天氣
の模様なとを氣遣ひ徒らに心配することなからんことを希望するなり